

霍 韜 晦 著

安慧「三十唯識釋」原典譯註

松 田 和 信

本書は表題の如く三十論安慧釈のサンスクリット原典からの現代中国語訳を主要な部分とする。著者の霍韜晦氏は、香港新亜書院研究所を卒業（一九六〇）の後、大谷大学大学院に留学し（一九六九〜七二）、現在は香港中文大学哲学系講師である。著者の日本留学中に起草された本書は、以下のような内容で構成されている。

- 一、自序……………壹ノ陸
- 二、唯識三十頌三訳対照……………一
- 三、安慧「三十唯識釈」原典訳註……………十三
- 四、梵文原典……………一五一
- 五、梵漢語彙対照……………二〇九

本書の序文には、著者がいかなる動機で三十論安慧釈を中国語に翻訳するに至ったかが述べられているのでそれを紹介しておこう。中国の佛教研究はしだいに衰えて、すでに長い時間がたっていたが、中華民国初年（一九一二）の頃、一時的に関心が

高まり、支那内学院・武昌学院・漢藏教理学院・三時学会等が組織され、その中、文献学の分野においては、呂徵・法尊、特に後者は十年間もチベットに留まった後、漢藏教理学院において多くの典籍（菩提道次第論等）を中国語に翻訳した。しかしながら、それらは少数の人の活動にとどまり、学术界に反響を引き起こすことはできず、さらに国難と戦争のため、佛教研究者たちは一日の安全もなく、また知識人も時代の問題を離れることができず、佛教学は机上の空論となつてしまひ、時代の圧迫の下、このわずかな幼い芽も若死してしまつたのである。かくして世界の学会の発展からとり残された中国佛教界にあって、著者は、一九六九年秋、ハーバード北京学社の援助を得て、日本に留学したのである。日本において著者はサンスクリットとチベット語を学び、西欧における文献学の学風を継承することをもって、中国の数十年來の研究に欠けていたところを補つて、漢語学界を助けることを自らの佛教研究の目的としたのである。そしてこのような立場に立つて、著者はまず第一に三十論安慧釈の翻訳を発表したのであるが、それはこの典籍のもつ佛教思想上の重要性のためであり、さらに著者が以前より研究していた成唯識論との比較に関心をいだいたからである。例えば、第三頌『不可知執受処了』という句にかんする兩者の相違点、転変と見相二分の概念等、さらには真諦の訳した転識論との関係といった問題が述べられているが、それらは我々にとつてもすでによく知られているテーマである。以上、「自序」の内容を簡単に紹介したが、次に置かれる「唯識三十頌三訳対照」は、

三十頌玄奘訳と著者による韻文訳、およびそれに言葉を補った散文訳との対照である。

二

著者は翻訳にあたって、レヴィ校訂本を底本として用い、寺本婉雅によるチベット訳校訂本、呂微の「安慧三十唯識釈畧抄」、荻原雲来・宇井伯寿・野沢静証の和訳、真諦訳の転識論、成唯識論と述記を参照し、さらには野沢訳を通してヴィニータデーヴァの複注をも参照している。そして以上の諸文献の参照の結果は、訳文に倍する量の「註」となって示されている。著者によると、この「註」の中では、第一に重要概念の原語的説明、第二に資料の比較、第三に安慧説の整理、第四にそれらの概念を現代語によって説明することがなされている。次に訳文についてであるが、著者は最初にできる限り玄奘の訳語を採用することに努めた(伝統を受けつぐために)が、一方では、それらの言葉に現在の概念と重大な相違があることに気付き、思考錯誤の結果、著者自身が以前に発表した部分訳(香港「法相学会集刊」第二輯所収)に対して若干の改訳を施すこととなった。例えば、以前には「変」あるいは「能変」とした *pariṇāma* を「転化」に、「唯識」とした *viñāpiti-mātra* を「唯表」というように。しかし三性説や諸心所の名称等、かなりの部分で玄奘の訳語をそのまま使用している。「転化」「唯表」といった訳語が現代中国語としていかなるニュアンスを持つのか、また著者がこれらの佛教術語を何を基準にして訳し分けるのか、そ

の辺の事情は筆者には不明である。

さて著者の訳文の疑問点を少し指摘しておこう。「十五頁十三行」*asakta* を「無対」と訳し「註」において、直訳すれば「無能」の義であるとするが、これは *asakta* → *asakta* の誤読。「十九頁十八行」*upādāna* を「所取」と訳すが、この場合 *upādāna* は *āśaya* の意味で用いられており(チベット訳は *ten*)、著者の訳は意味をなさない。レヴィ本二十三頁・本書六十九頁に出ている *ātmanolādayaḥ*……云々の一文は偈ではなく、安慧自身の注釈文である(このことは荒牧典俊氏の和訳にすでに指摘されている)。「百十一頁九〜十二行」この部分は第十七偈にあたる部分であるが著者は次のように訳す。

識転化分別。彼皆所分別。文相……
由此彼皆無、故一切唯表。

*viñāna-pariṇāmo 'yaṃ vikalpo yad vikalpyate/
tena tan nāsti tenēdan sarvaṃ viñāpiti-mātrakam//*
17//

著者は梵文句最初の *tena* を「由此」と訳し、「註」において、これが直前の「彼皆所分別。」を受け、玄奘訳の「由此正理」とは異なると述べるが、これは疑問である。この場合の *tena* は偈冒頭の識転変「分別を指しているのであって、「この(分別)によって分別されるものは存在しない。」の意であり、著者の訳文では、玄奘訳に引きずられた誤訳であると言われても仕方がない。なお第二十四偈については、d 句の *aparaṃ nīśvabhavata* は、著者も注記しているように「一三六頁」円

成実性を指すのであって、依他起性を意味するのではない。その点、著者は荻原・宇井・野沢訳の誤りを訂正している。次に第二十九偈にかんして、この偈は、唯識性に悟入した瑜伽行者の心はどのようなものであるかということ述べるのであるが、冒頭の *acitta* を玄奘が「不思議」と訳したことに対し、著者はそれを誤訳であると指摘するが「一四八頁」はたしてそうであろうか。すでに勝呂信静博士によって指摘されているように『唯識説における真理概念』法華文化研究第二号五十九頁）護法系統では「無心」という觀念を排除して、原文を *acitta* から *acintya* に変えたかもしれないのである。事実、我々はいウィが用いたのとは別の写本において、この部分が *acintya* と伝承されているのを確認できるものである(National Archives of Nepal 所蔵の佛教写本目錄 *darśana* の巻四十五頁を見よ。この部分が紹介されている)。なおこの写本はかつて長尾雅人博士によって紹介された「カトマンドウの佛教写本典籍」(岩井博士古希記念論集所収)の中に含まれる「世親三部作」と同一のものである。従って「不思議」という訳を誤訳であると断定することはできないように思われるのである。

三

著者は本書の末尾に付録としてテキストのローマナイズと梵漢対照の語彙を掲載している。なおこのテキストはレヴィ本そのままでなく宇井博士その他の訂正をとり入れたものであるが、ローマナイズする場合の約束事である単語を分書することがな

されず、しかもあまりにも多いタイプミス(この部分はタイプを複写したもの)のため、遺憾ながら学術的使用にはたええない。

āyādi→ātmādi (154. 19) 'ph→'py (155. 9)
 -bhāga sad→bhāga-sad- (156. 14) ina→iva (157. 15)
 ahni→agni (157. 21) sarvajñā→sarvajñāḥ (158. 2)
 chande→chabde (158. 9) ayukta→ayuktaḥ (158. 16)
 hala→phala (158. 20) yān→ya (159. 2)
 trividhā→trividhah (159. 6) rśana→pradarśana (159. 7)
 rūpādi viśaya→rūpādiviśaya (159. 14) sarvajñalam
 →sarvajñakam (160. 5) vijñapti→vijñaptito (160. 11)
 pravattatvād→pravittatvād (161. 12) bhaviṣyatiti/*
 欠落 (161. 14) sparśa manaskāra→sparśamanaskāra
 (162. 2) vedanāvit→vedanā vit (162. 3)
 saṃnīśraya karmakāḥ→saṃnīśrayakarmakāḥ (162. 5)
 bhogaḥ→ābhogaḥ (162. 17) abhikṛtya→adhikṛtya (162.
 22) vinittaḥ→nimittaḥ (163. 16) nīlam→mīlam
 (163. 18) bhavat→bhavati (163. 20)

最初の十ページだけでもこんな調子であって、一々指摘すれば際限がない。また本文中に引用されるサンスクリットも誤植が多い。また梵漢対照の語彙は宇井博士の作製されたもの(『唯識三十頌釈論』所収)に類似している。例えば *āśrayaparāvṛtṭi-rūpa* に対して「転依所成」とするところや *dig*, *dharmatāsa*, *parijñāṣaya* というような取り上げ方は、自ら索引を作製したのであれば考えられない仕方である。なおこの部分にもタイ

プミスが多い。ただし、prema→preman marma→marmam
等はタイプミスとばかりも言っておれない。この部分だけ変化
形で出したというのであれば別であるが。なおこれも宇井博士
の語彙と同一の取り上げ方である。

四

三十論安慧釈は、レヴィ本が出版されて以来、数多くの人に
よって研究され、テキストの訂正がなされてきた。さらに新し
い資料の発見によって部分的にテキストの異動が示されても
い (V. V. Gokhale, "Fragments of Śhīramatī's Tīrṣikā vijñapti-
bhāṣya in the Patna collection of Tibetan manuscript materials"
Journal of The University of Poona, Humanities Section, No. 27,
1968)。また我々の見るべき写本として、The Insti-
tute For Advanced Studies Of World Religions 所蔵の
MBB-1972-151 がある。これは今世紀になってネパールで書
写されたもので、資料的価値はあまりないが、それでもなお
次のようなテキスト訂正を我々に提供する(頁数はレヴィ本で
示す)。

triṣṇu→triṣṇu satsu (17. 8)

'nya-padartha→'nyaḥ padartha (17. 26)

kati-bheda→kati-prabheda (18. 2)

dharmatā→dharmaṭā sā ca dharmatā (40. 8)

rūpa-lakṣaṇaṁ→rūpaṇā-lakṣaṇam (41. 15)

ativśuddha→suviśuddha (42. 4)

sarva-dharma→bodhisattvānāṁ sarva-dharma= (45. 1)

また先に述べたネパールの National Archives 所蔵の世親三
部作に含まれないいくつかの写本も参照しえたらより完全な訂
正がなされうるであろう。(もっとも、これはレヴィ自身の用
いた写本であるかもしれない。)

ともあれ、著者がこの三十論安慧釈を出発点として、より多
くの典籍に対して研究を続けてゆかれることを期待したい。

(中文大学出版社・香港・一九八〇)

賛助会員募集

次の要項で賛助(定期購読)会員を
募集いたします。会員には本誌を発
行後すみやかに送りし、本会の出
版物を割引価格でおわけします。

○年間会費(二冊分)

国内 一、七〇〇円

海外 二、〇〇〇円(円払い)

○申込み 603 京都市北区小山上総町

大谷大学佛教教学研究室

* 申込みは郵便振替が便利です。

(京都 25303 大谷大学佛教
教学研究室)